

ゼミ生の卒業研究と美的感性

Senior project of lab students about aesthetic and affective sciences

浅野 晃
Akira Asano関西大学
Kansai University

キーワード：美的感性, 卒業研究

Keywords: aesthetic and affective sciences, senior project

1. 大学と卒業研究

私の勤務する関西大学総合情報学部では、卒業のためには「卒業研究」が必修である。学生は、3年生・4年生の2年間、いずれかの教員の「ゼミ」(理工系学部という「研究室」)に所属して、その教員の指導のもとで卒業研究を行い、卒業論文を執筆して卒業する。

教員によって、ゼミ生に対する卒業研究の指導のしかたはさまざまである。私自身も、現在の勤務先を含めてこれまで3つの大学に勤務してきたが、研究室での指導のしかたはさまざまであった。大学院修了後、九州工業大学情報工学部の助手をしていたときは、自分の研究テーマを研究室の学生・院生に割り当てて、卒業研究や修士論文のテーマとしていた。悪くいえば自分の研究のために学生を「使って」いたわけで、当時は自分も世に出るために必死であった。理工系の学部・大学院では、そういう「研究のアイデアを学生・院生に『投資』して、成果を『回収』する」体制の研究室は多いだろう。

次に助教授として移った広島大学総合科学部・大学院工学研究科では、学部生の方が教員数に対して少なかったので卒業研究の指導はほとんどなく、外国人の大学院生を積極的に受け入れていた。彼らは博士学位をとりプロの研究者となることを目指していた人々であり、指導対象の学生であると同時に共同研究者であったから、彼らを指導することで自分の研究も進むという関係にあった。

現在勤務している関西大学総合情報学部では、毎年十数人の卒業研究を指導しているが、卒業研究をそのまま生かした職に就く人はほとんどいない。いわば、彼らは研究の「アマチュア」である。そこで、彼らの指導に関しては、小学校以来の学業の最後に「研究とは何か」を経験してもらうことを目的としている。そこで、ゼミのテーマを「色彩・感性・装い」と標榜してゼミ生を募集し、ゼミ生は3年生の間は色彩の勉強を進める。そして、4年生になったら、色彩や感性を中心としたテーマを学生ひとりひとりが提案し、私はそれ

を「研究」の形にできるように助言しながら、学生は卒業研究を進めていく。

ここでいう「研究」をすることは、「仮説を立てる → 実験や調査でデータを集める → データを分析して仮説を実証する」というプロセスを踏むこと、という意味である。学生自身が自分の興味のあるテーマを提案して、それをもとにひとりで卒業研究を行うので、学生諸氏は卒業研究を「自分のもの」として楽しんでいるようである。その一方で、各研究はその学生だけのものであり、研究室のこれまでの研究を引き継ぐ、あるいは翌年のゼミ生に引き渡す、ということはない。研究に継続性がないのは研究業績をあげるという意味では不利であり、こういうやり方は自分がもう定年退職が見えてきた年齢であるからできることであろう。それでも、対外的に発表できる研究は毎年複数あるし、また、その後を他の研究者に引き継いだ研究^{1,2)}もある。当ゼミのウェブサイト³⁾では、これまでのすべての卒業研究を簡単に説明している。研究の「タネ」はいろいろあるので、もしもどれかの研究に関心をもたれて、引き継いでみたいと思われる方がいらっしゃれば、ご連絡をいただければ幸いである。

2. 卒業研究の例

ここでは、卒業研究をもとに対外的に発表した研究から、美的感性に関連するものを2つ紹介する。

2.1 口紅の色味や質感の選択と心理状態の関連性⁴⁾

この研究は、「化粧をする人が、その心理状態によって化粧のしかたを変えることはあるのか、どのように変えるのか」という学生の疑問から出発したものである。そこで、図1のような画像を回答者にオンラインで呈示して、「公的／私的な状況」と「ポジティブ／ネガティブな心理状態」を組み合わせた4つの状況・状態において、どの口紅を選ぶかを8通りの中での比較で選んでもらった。各状況・心理状態間でのスピアマンの順位相関行列を求めたところ、口紅の色味や質感



図1 呈示した唇の画像

の選択は、公的な状況では心理状態に影響されにくい
が、私的な状況では心理状態にやや影響をうけること
を示唆する結果が得られた。

この卒業研究では、当初は「ネイル」に関する調査
をしようと考えて、爪を飾ることによって心理状態に
変化が出るか、という予備調査を行ってみたが、変化
を上手く調査することができなかった。このとき、学
生の家族に化粧品の知識のある人がいて、その人の
「口紅は化粧を始めるときに最初に手にする化粧品で
あるし、簡単に塗り替えることができる。爪の飾りは、
仕事によってはできないことも多い」というアドバイ
スを受けて、口紅を対象とすることとした。

2.2 選択問題における赤色の効果⁵⁾

この研究では、2つのボタンのどちらかを押すとい
うタスクで、赤色のボタンは目立つと考えられるの
で、その赤色の効果をなんらかの干渉によって減らす
ことができるか、という問題を扱っている。オンライン
実験では、まず、図2の左（「1回目」）のような押し
ボタンを想定した黒い正方形を回答者に呈示し、「ど
ちらかのボタンを押すとお菓子が出来ます。どちらを押
しますか」と尋ねた。続いて、図2の右（「2回目」）の
ように、1回目で回答者が選んだ方のボタンを青、も
う一方を赤としたものを呈示し、もう一度同じ質問を
した。このときに、「『早く回答してください』という
動画を表示して焦らせる」「辛いお菓子が出来ます、と伝
える」「赤信号が写っているスライドショーを見せて、
『赤は停止』を示唆する」という干渉を行い、2回目の



図2 選択問題とボタンの色

選択で赤いボタンを選ぶ回答者が、干渉のないときに
比べて減少するかを調べた。実験の結果、3種類の干
渉の中では「辛いお菓子」が、赤を選ぶ人を減らすの
に有効であることがわかった。

この卒業研究では、当初学生が興味を持った疑問は
「交通信号では緑は進めで赤は止まれだが、それは人
の反応と合っているのか?」というものだった。その
後、私との議論によりこのような研究となったが、「焦
らせる」干渉が有効だろうと予想していたので、実験
の結果は意外であった。

3. おわりに

毎年2月上旬に卒業研究発表会が開かれ、そこでの
発表をもって、4年生の1年間の卒業研究は終わり
である。発表会のあと、彼らには「おつかれさまでした。
みなさんが研究をしたことにより、人類の知識がすこ
しだけ増えました」と伝えている。それはけっして大
げさに言っているのではなく、学業の最後に「知識を
学ぶのではなく、知識を作り出すという営み」を経験
した、ということを知ってもらうためである。今後、
卒業研究を担当できる回数は10回もないが、この方
針で、健康に気をつけて定年退職を迎えるまで続けて
いこうと考えている。

謝辞

各研究の一部は、日本学術振興会科学研究費
JP22K03202, JP23K11751, および2023年度関西大学
研修員研修費の支援を受けた。

参考文献

- 川澄未来子, 浅野晃, 時間動的な配色の「解決」による色彩調和性向上 (1) -図形的特徴の効果-, 日本感性工学会論文誌, 2022, 第21巻, 第1号, pp.9-16
- 川澄未来子, 浅野晃, 時間動的な配色の「解決」による色彩調和性向上 (2) -注視点制御の効果-, 日本感性工学会論文誌, 2022, 第21巻, 第1号, pp.17-21
- 関西大学総合情報学部・浅野ゼミのウェブサイト
<http://racco.mikeneko.jp/Members/>
- 浅野晃, 竹本翠, 口紅の色味や質感の選択と心理状態の関連性, 日本色彩学会令和5年度研究会大会 (美的感性研究会), 2023, pp.17-18
- A. Asano, A. Shimura, and C. Muraki Asano, Effect of red color and external interferences in selection tasks, 14th AIC Congress, 2021, pp.475-479